

一九七一年（出典不明）

新教師論

矢口 新

能力開発工学センター所長

専門的能力の変質

最近教育という仕事の専門性が問われ出している。時代の進展がそのような思考を生み出したのであろうが、興味のあることである。教師は従来専門的な仕事として見られて来たが、これは明治の頃からの現象である。それ以前寺子屋の師匠は、むしろ、神官、僧侶、浪人者（武家）の手内職の如きものであった。江戸の末期になって、多くの生徒を抱えた寺子屋が生じて、漸く新しい教育者としての地位を保つ者も多少はあらわれた。しかし本当に教師がさつそうとして社会の中に登場するに至ったのは、近代学校の発足によってである。だから専門教師というのは百年の歴史しかもたないのである。

当時の学校は日本近代化の使命を帯びた最も先端的な存在であった。その教師となった人たちは、はじめは寺子屋の師匠たちが多かったと思われる。また文字を読むことの出来る有識者で新しい時代を開くことの趣旨を理解した人が教師となった場合もある。それらの教師は時代の先頭にたつ知識人であった。教師たるためには彼等は教育

のあり方について相当な勉強をさせられたであろう。当時では驚天動地のカリキュラムであったし、学級一斉の教育方式などというのもなく思いもよらぬことであった。「教師必携」などを勉強してこれで日本の文明を推進するという自負をもったのであろう。恐らく当時八〇%の人々は文盲であったろうから、現代の常識である科学的な考え方についても全く白紙であったにちがいない。そういう社会の中で、当時の教師の仕事は全く専門的な仕事であって、社会の尊敬をかちうる理由も十分にあったのである。以後百年の間、専門職としての仕事は続いて来た。

話を現代企業に転じてみる。最近の企業はなかなか教育熱心である。特に大企業は技術革新や情報時代の到来という声にあおられて、企業内に働く人々の能力の開発すなわち教育には力をいれている。ここで教育する人々は、教育を専門にする人々は殆んどいない。何れも本来企業の中の何かの仕事の専門家である。教育は片手間の仕事となっている。つまり教育は専門職ではないのである。何かの専門をもつ人であれば、誰でも教育はできると考えられているといってもまず間違いない。

そればかりではない。もう少しいがった見方をすれば、企業の中で教育をする仕事に廻された人々は、本筋から離れたと感じている。また事実そういう待遇をする企業もある。誰でも教育はできるばかりでなく、余り有能でない人のやる仕事であるわけである。人によっては、企業の中の教育は教育ではない。あれは職業教育であって人間教育ではないとか、技能の訓練はするけれども、人格の育成はしないなどというかも知れない。しかしそういう区別をする程、教育の実態はちがっていないのである。全く同じことをやっている。何十人かを集めて、教科書を前において講義をしている。ちがうところは一方は社会人で

ある。一方は子供であるということ位しか見当らない。その子供を扱うのが専門職だと強弁するなら、それは教師は子守と同一だということに等しくなりそうである。

また昔の話にもどるが、江戸時代には儒者という当時の学問研究職があった。これらの人々は江戸の末期に近くなると、当時の社会の実態に合わない人々になったらしく「くされ儒者」などと馬鹿にされ出している。文化文政の頃はそういう時代であつたらしい。有名な戯作者式亭三馬の書いた「浮世床」にはそういうくされ儒者が文盲の町人どもに散々馬鹿にされることが描かれている。そういう学者が当時の人々を指導する力を失っているのである。これは学問の研究ということでも、時代の動きに目をふさいでいると、用をなさなくなる例としてあげたのであるが、教師も百年一日の如き仕事の仕方では、くされ教師と侮られることになるかも知れないのである。

明治のはじめにさつそうと檜舞台に登場した教師たちは、新知識人であり、社会の革新を担当する実践者であつた。未来の担い手たる教師であつた。しかし今では、もうそうではなくなっているのではないか。教師のもっている教育の技術にどれだけのものがあるのだろうか。百年來やってきた、学級一斉の教育方式は、素人にもこなさう程度のものでしかないように見える。教師のもっている知識技能が未来のものを示しているとは思えない。教育者といえは学級集団を相手におしゃべりをしている人位にしか考えられなくなつたらおしまひである。

再び企業の例をあげよう。最近、いくつかの企業が従来のような形でない教育、つまり人々を集めて講義をする形でなく、学習者が自ら問題に対決して仕事を処理する能力を習得する教育の形を開発しようとして、そういうシステムを開発する教育者を養成しようとしてい

る。新たな時代の新たな教育者が、専門といわれる教育者たちの住んでいる世界とは別なところで育成されつつあるということは、注目すべきことである。確かに教育は転換しなければならない所に来ているということとは、教育の仕事をする専門的能力が変質しつつあるということであろう。それが何かをいち早く把むべきであろう。

寺子屋師匠の目

今どき寺子屋師匠をもち出しては、時代おくれといわれるかも知れない。それなら松下村塾の松陰でもよいのである。松陰はその個性の故に最近また教育者の典型として注目されている。しかし私が問題にしたいのは、その個性そのものでなく、むしろ寺子屋や塾一般の教師たちである。もちろん教育者であれば、目は被教育者に向けられていたということになるが、そこにはもう少し考えてみるべきことがある。

寺子屋や塾の教師たちと学校教師たちの目を比較するために、明治の初期の頃を考えてみる。明治初期に近代学校の設置がきまつて寺子屋師匠たちは、新しい学校の教師として採用されたとき、彼等が教師たるために、とくに勉強しなければならなかったことはどんなことであつたらうか。寺子屋師匠たちは、多くは手習師匠であつたから文明開化時代の新しい西欧的なカリキュラムを採用した学校の教師たるためにはその新しいカリキュラムの中味である教科の一つ一つが全く新しい勉強であつたにちがいない。が、それよりも更に彼等が迷惑したことは学級一斉の教育方式であつたであろう。これは彼等に相当のショックだったにちがいない。彼等はそれまで一人一人を視野の中にいれてはいたが、集団としての一括取扱いということは夢にも思わなかつた。生徒は現代のように満六才になつたら四月一日に入学し

て来るなどという形ではなかった。勝手な時に入ってくる。そうすると師匠は手本を書いて与える。そしてそので道具合で次の手本を書く。寺子屋では寺子の集団はあっても、一括して取扱うということはない。撮影の技術にたとえていうと、いつも一人一人がクローズアップされていた。ロングにひいて学級を見るなどということはなかった。新しい教授法として、まず教師が教科書を読む、つぎに生徒に唱和させる、次に回答をするなどと教えられて、びっくり仰天したであろう。

併しその後百年の間にそれはすっかり身についた。現代の教師は一人一人を育てることに途惑いを感じている。学級の人数が多いからそれがむつかしいのでなく、一人一人を見ることが、何をすることがわからないのである。そういうセンスがなくなっている。いつかへき地の学校で授業を見たことがある。複式の学級で生徒数五、六人。半数の生徒に対して指導をするとき、あとの半数は自習している。その二、三人の生徒に対する指導でも教師は教壇の上で演説まがいの講義をしていた。学級一括の取扱い法がいかに身につけている（？）かのあらわれであった。生徒のそばへ寄って行って見てやる、直してやる、一緒に話してやるということがより大事なことであるという感覚がなくなっている。教育というのは、言葉でなされるものだという考え方はもう考え方などというものでなく、教師の身につけてしまっている。生徒が何かをやっていることのなかに成長があるのであり、そこでやることを直してやり、一緒にやってやるのが教育であるとは考えられなくなっている。

これは現代の教師があらゆるものを、知識的なものとしてとらえ、言いかえれば言葉としてとらえて、その伝達ということに主眼をおいた姿である。そのことが教育を生命のないものに行っていることではないであろうか。しかも教師は、それに気付かないのである。これは明治

以来の百年の伝統が生み出したものであろうが、それによって教師は生徒という人間を見る能力を失っている。人間の見方を知識として知っているかも知れない。言葉でどうすべきだということではできるかもしれない。しかし実際に一人一人の生徒の行動を見て即座にどこがどうなのかと直してやることができなくなっている。第一そういうことに気付かないでいる。教師が生徒を見るのは、紙の上に書かれたテストの答を見たときである。それは人間を見る通路としては細い通路である。もとより言葉の上では、教育は人格を育てるものであると言っても、それがどのように細い道で行なわれなければならないでいるのであつて、しかも細い道でしかないことに気付かないでいる。

これは、寺子屋や昔の塾の教師たちと根本的にちがうことである。寺子屋の師匠たちは生徒の数が少ないからできたのだなどというのは見当ちがいである。現代の教師は集団をカッコよく動かすことに全力を注いで来たのであつて、一人一人を見ることに力をいれて来たのではない。目のあり方がちがうのである。しかしそのことは、こと教育という本質から考え直してみると重大な問題を含んでいる。現代の教師は考え直さなければならぬのではないか。

おりの中の教師

教師が寺子屋師匠の眼を失ってしまったのは歴史の必然の結果であるが、どこの国でも同じような現象がおこっている。わが国は特にその傾向が強いけれども、それは百年という短い期間における急激な転換の結果であろう。

教育とは教室の中ではじまり、そこで完結するという考え方は、その教室とは集団を一括して取扱う場であるという考え方は、もう考え方などというように言われると奇異に感ずるようなことである。あまり

に当り前すぎて、そう言われると却っておかしいと感ずるであろう。しかし考えてみれば、それでは教師と生徒はともにおりの中の猿の如きものではないか。教育が猿芝居にならなければおかしいということになりそうではないか。

教師や生徒が教室というおりの中でしか行動しなくなったのは、その根底に教育を言葉の伝達という次元で考えたからである。いわゆる知識教育といわれるところであるが、知識というものが極めて悪い意味に解されていて、言葉で伝達されるものというような錯覚でとらえられている。教科書の中には、そういうものが書かれてあって、それをコップに水を注ぐように、頭の中へ詰め込むことができると感じている。教師は教科書の中味を頭の中にもった人たちであって、生徒にそれを伝えるのである。その際に教科書がより確実な知識の倉庫であって、教師はそれに基づいて、その解説をするのである。こうなると、教師は子供に与える程度の知識というものの保持者であればよいことになってしまう。

教育というのは、生活する人間を育てることであって、人間に、環境に適応し、それを改善してゆく実践的な能力を与えるものである。いやそんな定義的なことはどうでもよい。実際に人間は、具体の生活の場で、そういう行動をしているのである。人間のそういう生活行動力というのは、単に知識というものを心得ているからでなく、もっと具体的な行動で細かく神経を使って生きていくのである。知識をおぼえているとか知っているとかが、そういう具体の生活場面を処理してゆかせるのでなく、もっともつと複雑な神経を使っている。生活ができるということ、すべて知識に翻訳してしまつて、そういうものを持つていれば生活できると考えたのは現代教育者の錯覚であつた。

しかし、この錯覚を錯覚と思わずその中に長く住んでいる間に教師

は人間が見えなくなったのではないか。知識の容れ物としての人間の行動が、知識をもっているから成立つというような目でしか見られなくなる。人間の心的活動を知情意などと分けるのは一九世紀以来の考え方であるが、その情とか意とかも専ら知の従属的地位しか与えられていない。すべてが知識という次元を通して考えられている。知情意という見方が正しいかどうかはともかく、そういう考え方は、人間そのもの、人間の生きた行動が見えなくなつてしまふ。そういう物の考え方は、生きて働いている具体の人間を育てるといふことはできなくなつてしまふ。

現代の学校が、外の社会との間に高い壁をつくり、交流をと絶して外の世界で働いている人間の行動する姿を見ないで、教育を考えることができるかの如くに錯覚しているのは、右のような事情に基づくのである。どんな生活をする人間を育てようとする場合でも何かの知識を与えればそういう人間が育つというマンネリズム的思想しかもち得ない。知識で万事解決するという思考の習慣である。教師は人間ないし人間の生活を見ることができなくなつてしまつた。そこからは未だの社会に生活する人間がどうして育てられようか。外の社会を見よというようなことを教師に話しても、それがどうして必要なのかさえもが、よくわからなくなつていく。生活を体験する、現実の人間の行動を見よということが、教師の感覚から消えている。教育が生命を失ふという事は、実はこのような生きた人間の生活の中で働かざるを得なくなったからである。教育が革新をとげなければならぬと言われている。教師集団がそういう状態であれば、到底教育に生命は入らない。それは政治や行政のあり方によつてかわることでもない。教師集団が自らを改革する以外にないことなのである。

教師は何をなすべきか

教師が喪失した能力をいかにしてとりもどすか、新たな社会において必要とされる新たな能力をいかにして獲得するのかという問題を提出されたとする。従来の教師なら、まず誰かの書いた本を読んで何かをわかろうとするかも知れない。現にこの文章を読んでいる人もそういう気持で読んでいる人がいるかも知れない。そういう情報を得ることも大切であるが、それを読めば何かができると考えたら、それこそ誤りである。そういう何かの知識をうることがはじまりであり、終りであるという考え方こそ基本的に改められるべきであって、自らの目を使い、自らの頭を働かし、手足を動かして、現実を一步たりとも半歩たりとも改めることが、最も大切な教師の学習である。そういう努力をしても現状は打開できないかも知れない。それができないのは、能力が欠けていることなのであろう。その時にそれをそう考えないで、それを何か別のものの条件に帰着せしめるなら、それこそ全く、知識的な考え方のあやまりである。文部省がやってくれなければできないという逃口上が出てくれば、それは自分は何もしないという表現であろうし、自分ではもうこれで十分やっているということならば、それは崩壊しようとする教育の上にあぐらをかいていることを自覚しない者の言ということになる。すべては新たな実践によってはじまる。その積みあげ以外に新たな転換は起こり得ない。

教師は過去百年の悪しき伝統によって失わせられた能力を、これから恢復しなくてはならぬ。知識の受け売りのないしブローカー的な仕事に甘んじているように飼育されて来たその境涯から脱却することである。それが教師の社会的な位置づけの転換を自ら成就することになる。いま教師が自らの力で獲得してゆくべき能力は、忘れてしまった

教育設計能力とでも言うべきものである。人間生活と行動を自らの目で捉え、人間にいかなる知識が必要かでなく、いかなる行動力が必要なのかを分析し、その行動を形成するための行動の場を設計することは、他ならぬ教師の仕事ではないか。それは誰かが教科書に知識として書いて教師はその解説をするという習慣にならずに来た教師には、すぐには納得できない仕事かも知れないし、その能力を失った教師にはよけいな難題であるかも知れない。しかし教師がそれをやらなければ誰がやるであろうか。社会がいまそれを教師に求めているのである。

社会がいま大きく転換しようとしていることは、教師もぼんやりとは感じている。しかしそこへ具体的に入って実践し、そこから教育すべきことをとり出して来ようと思わない。そういうことは教師のすることでないかのように思っている。そこに教育者としての転落があるのである。たとえば今社会のあらゆる分野にコンピューターが入りこんでいる。ひとり学校のみ殆んどコンピューターの姿を見ることができない。小、中、高等学校で一体コンピューターが働いている所がどれ位あるであろうか。どうして教師はその事態を自らの手で打開しないのか。これは何もコンピューターに限ったことでなく、あらゆる社会の生活の姿に対して言われることである。生活は刻々と進展している。そういう新たな人間生活の動きに全く目をふさいでいるということは何とも思わない教師に未来に生きる人間の教育ができるであろうか。人間は常に新たな可能性に向かって進んでいる。そこからは人間を幸福にするものも、不幸にするものも生れて来ている。その人間の生命の働きの具体の姿の中から、教育というものを生み出して来るべきではないか。教師の住む世界が、浮世ばなれをした仙人境では、そこに育てられた人間も物の役に立たないのである。浮世ばなれの仙人

境に教育の場がなくなってしまったのは、教育が観念を授受することだという錯覚に陥ったが為である。生きて働く場が教育の場であることを忘れたが為である。

教育は本質的に生活からはじまり、生活に終る。教育の出て来る地盤は生活である。教師はその生活の中で、人間の育ちゆく姿を発見し、それを合理的に推進する仕事を受けもつ。その生活の中で人間の働く姿を分析して、教育の目標が何であり、その方法がどうあるべきかを設計するのである。そういうなまの生活の中から生れる教育は、ただ言葉と知識による教育ではない。行動そのものである。

シミュレーターという機械がある。航空機の操縦の訓練をするためには航空機のシミュレーター（模擬装置）を使う。本物に未熟練者がのることは危険も伴う。本物と全く同じ機能を地上で再現して訓練の道具に使うのである。それは場合によっては本物にのる以上に学習者にさまざまな経験を与えることができる。教育とはこういうものである。教育は生活のシミュレーションでなくてはならぬ。生活すると全く同じように、頭を働かし、神経を使う。身体を使って行く。しかも生活する以上により能率的に行動させ、人間をきたえるのである。教師はそういう生活のシミュレーションをつくりあげる役目の人種である。そこに教師の専門性がある。

最近教育工学などという言葉が一部ではやり出してある。教育機器の利用などということも言われ出している。しかし全般的には、馬耳東風のようなものである。流行する言葉は半分以上が間違いのことが多いから、それに右往左往する必要はないが、流行を追う教師も、流行から目をそむける教師もいずれも生活から目をそむけていることでは同様である。

月世界へ行った飛行士たちが、月の世界での行動をシミュレーター

で訓練されたように、新しい生活をつくる未来の若者をつくる教育者は、生活のシミュレーションを工夫できる人でなくてはなくてはならない。